

2019

第29回守谷市青少年海外派遣事業報告書

令和元年7月24日(水)～7月31日(水)



守谷市

目 次

● 守谷市長あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・	1
● 守谷市国際交流協会会長あいさつ・・・・・・・・	2
● 第29回守谷市青少年海外派遣団員名簿・・・・・・・・	3
● 事前・事後研修カリキュラム・・・・・・・・	4～5
● ホストファミリー名簿・・・・・・・・	6
● 海外派遣日程・・・・・・・・	7
● ドイツ・マインブルク市周辺地図・・・・・・・・	8
● 思い出の日記・・・・・・・・	9～18
● 派遣団員報告書・・・・・・・・	19～42
● マインブルクの新聞に掲載された記事・・・・・・・・	43
● フォトメモリー・・・・・・・・	44～45
● 保護者の声・・・・・・・・	46
● 編集後記・・・・・・・・	47

未来への礎



守谷市長 松丸 修久

第29回守谷市青少年海外派遣も、多くの皆様のご協力により無事に終了いたしました。マインブルク市への派遣は、この夏で10回目となりました。ライザー市長をはじめ、マインブルク市民の皆様が派遣団を快く迎えてくださったことに、心より感謝の意を表したいと思います。

事前研修の最終日に行われた結団式では、団員の皆さんに、守谷市の代表としてマインブルク市へ行く心構えができていたことを感じました。また現地では、ホストファミリーの皆様の優しさと温かさに触れ、お世話になった方々への感謝の気持ち、そして言葉の壁を越えて意思を伝え合うことの喜びと大切さを、改めて実感したことでしょう。さらに、バイエルン州の美しい自然と歴史ある文化の中で過ごすことで、ドイツ社会の精神的豊かさも感じる事ができたと思います。

団員の皆さんには、この8日間を通じて得た貴重な経験を生かし、それぞれの夢の実現に向けて力強く歩んでいてもらいたいと思います。そして今後も、ホストファミリーをはじめ、マインブルク市で出会った方々との交流を継続していただき、異文化への理解をより一層深められることを期待しております。

最後に、本事業を実施するに当たりご協力をいただきました守谷市国際交流協会をはじめとする関係者の皆様に心から感謝を申し上げ、御挨拶いたします。

友好の架け橋へ



守谷市国際交流協会会長 小川 一成

第29回守谷市青少年海外派遣事業が、無事成功のうちに終わられたこと
をお喜び申し上げます。

平成2年にこの事業が始まって以来、守谷市国際交流協会は姉妹都市との
市民交流を推進し、市の国際交流の発展に寄与するため、全面的に支援、協
力してまいりました。

国際交流への関心と意欲を持った派遣団員の皆さんにとって、異文化の中
で過ごし、ドイツの方々と心と心で触れ合った今回の体験は、この上ない財
産となることでしょう。また、皆さんはマインブルク市民の歓迎の気持ちに
触れ、お世話になったホストファミリーをはじめ、滞在中に関わった全ての
方々に対しての感謝の気持ちを胸に帰国したことと思います。今後、学生訪
問団がマインブルク市から守谷市に来市した際には、今度は自らがホストフ
ァミリーとなって、ドイツで受けた温かいおもてなしへのお返しをしていた
だきたいと思います。そして、当協会の活動にも積極的に参加し、一緒に守
谷市の国際交流を盛り上げていただきたいと考えております。

当協会は今後も、国際交流を通してより広い視野を得る機会を青少年に提
供するため、この事業のお手伝いを続けてまいります。

結びに、守谷市と姉妹都市マインブルク市との交流が益々発展することを
祈念申し上げ、御挨拶と致します。

第29回守谷市青少年海外派遣団員名簿

●団員

氏名		学校	学年
前田 陽輝	まえだ はるき	守谷市立けやき台中学校	中1
向井田 里那	むかいだ りな	茨城県立並木中等教育学校	中2
今泉 穂海	いまいずみ ほのみ	守谷市立御所ヶ丘中学校	中2
蛸原 まのあ	えびはら まのあ	守谷市立愛宕中学校	中3
阪口 千結樹	さかぐち ちゆき	茨城県立並木中等教育学校	中3
長谷川 優樹	はせがわ ゆうき	守谷市立御所ヶ丘中学校	中3
高田 鈴	たかだ りん	茨城県立下妻第二高等学校	高1
吉田 伊織	よしだ いおり	茨城県立取手松陽高等学校	高2
森 基思	もり もとし	茨城県立並木中等教育学校	高2
菅原 由羽	すがわら ゆう	あずさ第一高等学校	高3

●引率者

氏 名		所 属
宮本 敏弥	みやもと としや	守谷市国際交流協会
石塚 雅大	いしづか まさひろ	守谷市役所 生活経済部 経済課

事前・事後研修カリキュラム

事前研修（全6回）				
月 日	曜日	時間	内容	場所
6 月 9 日	日	9:30～	挨拶 提出物、スケジュール等の説明	市役所 大会議室
		10:00～	旅行業者説明（株式会社近畿日本ツーリスト）	
		11:00～	海外派遣保護者の体験談（長縄さん、沼田さん）	
		12:00～	昼休み、自己紹介	
		13:00～	講話「国際化ってなんだろう？」 講師：守谷市教育委員会 指導室 西尾直美さん	
		15:00～	講話「海外派遣の心構えと国際交流活動について」 講師：守谷市国際交流協会 会長 小川一成 氏	
		16:00～	グループワーク Part1 「NASA ゲーム」「ペーパータワー」	
		17:15～	報告書の担当決め 団長の漢字ゲーム	
		17:45～ 18:00	提出物の回収 事務連絡（宿題・次回の研修等）	
6 月 16 日	日	14:00～	ドイツについて知ろう！	市役所 和室
		15:00～	グループワーク Part2 「アレックス君のホストファミリーになったら」 （ホームステイの心構え・注意点）	
		16:30～	リーダー・副リーダー決め	
		16:40～	フェアウェルパーティーについて	
		17:40～ 18:00	ホストファミリー、マインブルクでのスケジュール発表 事務連絡（宿題・次回の研修等）	
6 月 30 日	日	14:00～	フェアウェルパーティーの準備・練習	市役所 大会議室
		15:30～	私・僕のホストファミリー	
		16:00～	語学講座①	
		17:00～	英語で自己紹介・家族紹介	
		17:50～ 18:00	事務連絡（宿題・次回の研修等）	

月 日	曜日	時間	内容	場所
7 月 7 日	日	14：00～	フェアウェルパーティーの準備・練習	市役所 大会議室
		15：00～	語学講座②・小テスト	
		15：30～	先輩団員の体験談を聞こう！～ドイツを味わいながら～ H29 派遣団員：稲本さん，長縄さん，沼田さん，横張さん	
		17：00～	コミュニケーション・スキル	
		17：50～ 18：00	事務連絡（宿題・次回の研修等）	
7 月 14 日	日	14：00～	語学講座③ ～守谷と日本の魅力を考えよう！～	国際交流研修 センター （ログハウス）
		14：30～	サンキューカードの作成	
		15：30～	海外旅行の注意点・荷造りについて	
		16：00～	フェアウェルパーティーのリハーサル	
		17：00～ 18：00	サプライズ発表，事務連絡（宿題・次回の研修等）	
7 月 22 日	月	14：00～	荷物の確認	市役所 大会議室
		14：45～	こんなときどうする！？	
		15：30～	フェアウェルパーティー最終確認・準備	
		16：30～	添乗員顔合わせ・出入国時の注意点（近畿日本ツーリスト）	
		17：00～	結団式	
		17：30～ 18：00	事務連絡（出発日・帰国日について）	
事後研修				
8 月 9 日	金	14：00～	提出物の確認	市役所 中会議室
		14：10～	ホームステイの振り返り	
		15：30～	担当職員からのメッセージ	
		16：00～	団長・引率職員からのメッセージ	
		16：30～	今後の抱負	
		16：50～	解団式	

ホストファミリー名簿

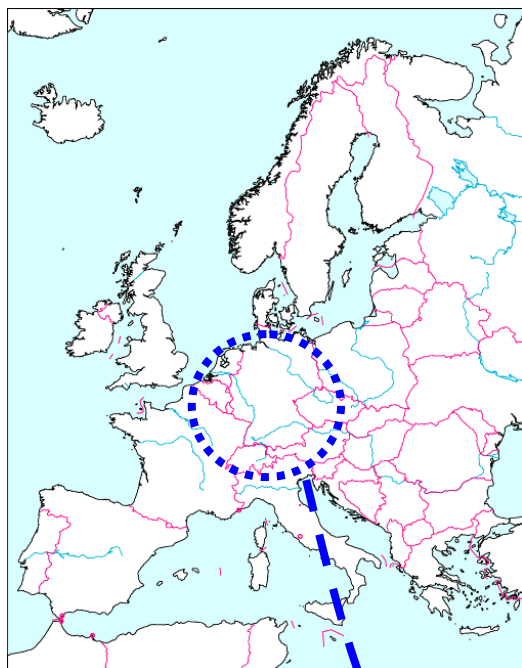
令和元年度 派遣団員	ホストファミリー
前田 陽輝	フィヒトナ家
向井田 里那 吉田 伊織	ファルケ家
今泉 穂海	レッツラフ家
蛸原 まのあ	ビーコフ家
阪口 千結樹	シュロッサー家
長谷川 優樹 高田 鈴	ラウ家
森 基思	ゾレダー家
菅原 由羽	エッカー家
宮本 敏弥	シェーンフーバ家
石塚 雅大	ウィルケ家

海外派遣日程

日程	プログラム
7月24日（水）	日本 TX 守谷駅（秋葉原・浜松町経由）→東京国際空港（羽田空港） →✈️ルフトハンザ航空 LH715（12:35 発）→ドイツへ
	ドイツ ✈️ミュンヘン空港到着 → 貸し切りバスでマインブルクへ ・ペンションで夕食（ライザー市長・ホストファミリーと一緒に） ・ホームステイ開始
7月25日（木）	・学校訪問（ギムナジウム・実科学校） ・ラングウィーザ副市長表敬訪問 ・バスでファータスドルフ村へ遠足（オーガニック農園見学） ・農園で夕食
7月26日（金）	・ランツベルク・アム・レヒ市で自由時間 ・ノイシュヴァンシュタイン城見学
7月27日（土）	ホストファミリーと終日過ごす
7月28日（日）	
7月29日（月）	・ホストファミリーとの時間 ・フェアウェルパーティー ・ベランダで夕食
7月30日（火）	・ミュンヘン観光バスツアー（日本人ガイドが案内） ・自由時間 ミュンヘン空港✈️ルフトハンザ航空 LH714（16:15 発）便→日本へ
7月31日（水）	日本 ✈️東京国際空港（羽田空港）到着→TX 守谷駅（浜松町・秋葉原経由） →守谷市役所 ・帰国報告会



ドイツ・マインブルク周辺地図



ドイツ連邦共和国
Bundesrepublik
Deutschland

面積 約 35 万 7,121 km²
人口 約 8,218 万人 (2015 年現在)
首都 ベルリン (Berlin)



バイエルン州
マインブルク市
Stadt Mainburg

ノイシュヴァンシュタイン城

面積 約 61.65 km²
人口 約 14,900 人 (2015 年末現在)



思い出の日記



6月9日(事前研修①)

6月9日、初めてみんなと顔合わせをしました。最初の頃はあまり会話もなくみんな緊張していましたが、お昼ご飯になり、みんなで集まってご飯を食べているうちに、どんどん会話が盛り上がりました。最初の緊張が嘘のように、とても楽しい時間を過ごすことができました。

お昼ご飯を食べ終わると、守谷市教育委員会の西尾さんと守谷市国際交流協会の会長である小川さんから、とても

ためになるお話を聞きました。講話中もみんなで活発に意見を出し合い、交流を



深めることができました。休憩時間に団長が振る舞ってくれたパウンドケーキは、とても美味しかったです。その後のグループワークでは、みんなで積極的に自分の考えを出し合って“チームビルディング”を行いました。一人では出来ないことも派遣団員全員で力を合わせれば出来るということを知り、これからの研修やマインブルでの生活が、より一層楽しみになりました！！

(阪口 千結樹)

6月16日(事前研修②)



この日の研修は、以下の三つのことを行いました。

最初にドイツについて、スライドでたくさんのことを教えてもらいました。日本でメジャーなドイツのブランド、日本との比較クイズなど、今まで知らなかったことを知ることが出来て、とても楽しかったです。

次のグループワークでは、自分達がホストファミリーになることを想定し

たホームステイ中のプランニングをしました。こちらの都合だけでなく、相手のことも考えながら予定を組むことが難しかったです。私たち団員を受け入れてくれる家庭の皆さんにも、このグループワークで体験したことを踏まえて接していきたいと感じました。

最後にフェアウェルパーティについてです。パーティー全体の流れについて説明を受けた後に、団員の出し物や係について話し合いました。そこで出し物として決まったのが、クラッピングミュージックの演奏と伝言ゲームの2つです。率先して意見が出たので、スムーズに決まって良かったです。

この後にあった受入家庭のマッチング発表では、みんなホストファミリーのことを知ることが出来て、嬉しそうでした。私もホストファミリーのプロフィールを見て、行くのがより楽しみになりました。
(菅原 由羽)

6月30日(事前研修③)

この日はまず、フェアウェルパーティの準備・練習をしました。クラッピングミュージックとサンキューメッセージの時の、並び順や衣装を決めました。どちらもたくさんの意見やアイデアが出てすぐに決まり、残りの時間をクラッピングミュージックの練習に使うことができました。思っていた以上に難しかったです。当日に良い演奏ができるように、みんなで力を合わせて頑張っていました。



次に、ホストファミリーに自分と家族について英語で紹介する練習をしました。いくつかのグループに分かれてお互いの紹介を聞き、「写真がもっとあるとより良くなると思うよ」など具体的なアドバイスをしました。休憩時には、団長が作ってくれたヨーグルトケーキを食べました。とても美味しかったです。



みんなが元気になった後は、現地でよく使うドイツ語やホストファミリーとの会話で使うと喜んでもらえるドイツ語を学びました。次の研修の時に簡単なテストがあると聞き、みんな驚いていました。事前研修3回目で、他の団員との仲もだんだん深まり、仲良くなれた楽しい研修でした。

(蛸原 まのあ)

7月7日(事前研修④)

7月7日七夕の日に、第4回目の研修がありました。少しずつ慣れてきたような気がします。フェアウェルパーティのクラッピングミュージックの練習をしました。難しいリズムの担当グループは、阪口さんが楽譜を作ってきてくれて、それを見て少しずつ出来るようになってきました。

そして、ドイツ語の小テストがありました。みんな直前まで、ルイーザさんからもらったプリントを直視していました。

先輩団員との交流もあり、ドイツの飲み物やグミなどのお菓子を食べながらの座談会でした。不安なところなどを聞いてよかったです。(今泉 穂海)



7月14日(事前研修⑤)

ログハウスで5回目の事前研修が行われました。この日は主に、ルイーザさんの語学講座やフェアウェルパーティの練習に取り組みました。クラッピングミュージックや伝言ゲームをたくさん練習しました。

いよいよ17時になり、保護者も参加してパーティのリハーサルがスタートしました。皆が一番緊張していたクラッピングミュージックは、息を合わせて大成功で終わりました。伝言ゲームも、上手に説明できないところもありましたが、保護者にも参加してもらい、笑いながら皆楽しくゲームをすることができました。

最後に、本番ではホストファミリーに発表する感謝の手紙「サンキューメッセージ」を、この日は保護者宛てに書いて一人ずつ発表しました。話す前から泣いている人もいれば、泣くのを我慢しながら一生懸命感謝を伝える人もいて、感動的な光景でした。

(前田 陽輝)



7月22日(事前研修⑥～結団式)



皆、フェアウェルパーティで発表するクラッピングミュージックの練習に集中して励んでいました。この日を逃すと、自主練習はできますが、合同で練習することはできないので、出来る限り揃えるための工夫を凝らしました。たとえ揃わなかったとしても、終わりを仕上げられるようにどうするかなどを協力して考え、完成させました。

また、ドイツへ持って行く荷物も見せ合い、いよいよドイツへ行くという

実感が持てるようになりました。お土産については、お菓子を持って行く人が多くみられました。日本の伝統的なお菓子なども入っていました。また、ホストファミリーとのメールでのやり取りの状況などの情報交換もしました。

(長谷川 優樹)

7月24日(出国～マインブルク市到着)

ドキドキする気持ちとワクワクする気持ちを抱き、守谷駅に集合しました。「東京は人が多いね！」なんて話しながら、あっという間に羽田空港に着いてしまいました。10 時間以上のフライトのスタート！映画を観たりゲームをしたり…。各々やりたいことをしていました。

そして、ミュンヘン空港に着いてホストファミリーに会った瞬間、疲れや時差ボケなんて吹き飛びました！バスに乗って夕食会場へ向かう時も、ホストファミリーと会話が出来ました！明日からは、今までにない新しい冒険のスタート！とても幸先の良いスタートを切れました。1 週間楽しもう！と思いました。



(吉田 伊織)

7月25日(学校訪問～マインフルク市役所表敬訪問～農園見学)

7月26日(学校訪問～ノイシュヴァンシュタイン城見学)

◆7月25日

今日から2日間ホストファミリーの通っている学校に行きます。夏休み直前なので授業はなく、レクリエーションを楽しむことができました。同い年とは思えないほど美男美女が揃っていてびっくり！みんなフレンドリーで良かったです。そして午後からは副市長表敬訪問を行い、ファータスドルフ村の農場へ行きました。美味しいご飯も食べられて、みんな大満足でした。



◆7月26日

学校2日目。今日は最終日なので、成績表をもらって終わりでした。みんなとお別れするのが、なんとなく寂しかったです。でもみんなと笑顔でお別れできて、「また会える」という気持ちになりました！受け入れてくれた学校に本当に感謝です。

そして、その後は目玉イベントのノイシュヴァンシュタイン城見学です！40分ほどかけて上まで登り、説明を聴きながらお城の中を回りました。帰りのバスでは疲れて熟睡してしまいました。明日からは終日ホストファミリーとの生活が始まります！
(吉田 伊織)



1月27日・28日 ホストファミリーと過ごす



27, 28日は、1週間のホームステイの中で私達に与えられた貴重な休日でした。この2日間は、ホストファミリーと自由に過ごす事ができました。

私は27日の午前中、ホストファミリーとボードゲームをして遊びました。ホストファミリーの家には、10種類を超えるボードゲームがあり驚きました。ゲーム中は意思の疎通が完全にはできませんで

したが、感情を共有できて嬉しかったです。その後、ショッピングモールへ行きました。日本とは違う雰囲気のレストランで食べた、ペンネのようなドイツの伝統食「シュペッツレ」が美味しかったです。

28日はお祭りへ行きました。その日は、事前にもらった民族衣装を着て、他の家庭と一緒に祭りの会場を回りました。最初に「ここが祭りの場所だよ。」と言われた時は驚きました。なぜなら、日本のお祭りとは大きく違っていたからです。日本のお祭りは、道に人が溢れかえって屋台で遊ぶというスタイルですが、ドイツで連れて行ってもらった祭りの会場はまるで遊園地のようなものでした。その後ホストシスターと一緒にチュロスをつまみながら、お互いの趣味について話したことが、今でも昨日のことのよう思い出せます。
(向井田 里那)

1月29日 フェアウェルパーティー

この日はホストファミリーとのお別れ会、フェアウェルパーティがありました。事前研修ではなかなか揃わなかったクラッピングミュージックも、本番では1番良い演奏をすることが出来ました。

そのあと会場全体で伝言ゲームをしました。お互いの言語が異なる中では、伝言が難しく、とても盛り上がりました。最後の人まで正しくお題が伝わったものは1問もありませんでしたが、





みんなの楽しんでいる様子が伝わってきて嬉しかったです。

最後に、団員からホストファミリーへサンキューメッセージを読みました。滞在中の感謝の気持ちを手紙で伝えました。ドイツ語でメッセージを書いた団員もいて、会場からは大きな拍手が湧きました。

出し物の時の盛り上がりとは空気が変わり、お別れの悲しみからたくさんの人が泣いていました。プログラムがすべて終わ

ると、外で食事会がありました。途中でサプライズの演奏もあり、たくさんの人と会話を楽しみながら充実した時間を過ごせました。

(菅原 由羽)



7月30日 ミュンヘン観光・帰国



この日、楽しい時間が過ぎるのはとても早いと言いますが、まさにこの事だと強く実感しました。今日は、団員の仲間や引率の方々と出会ってから51日間という、長いようで短いひとつの旅のような時間の幕が閉じる日でもあり、7日間、本当の家族のように夢のような時間を過ごすことができたホストファミリーとの別れの日でもあります。

朝、目を覚ますと、この日は午前中にドイツの三大都市の一つであるミュンヘン観光の予定があったため「初めてのミュンヘン観光だ！楽しみ！」とワクワクした気持ちはもちろんありましたが、その気持ちよりもやはり「今日で最後なんだ。このままずっとここにいたい。」という気持ちの方が大きかったのを覚えています。

この日、私のホストファミリー達は用事があったので一緒にミュンヘン観光には来られませんでした。だからバス停までホストマザーが車で送ってくれました。バスに乗る時、私達はお別れをしました。「もう会えないかも。」と思って涙を堪えていた私に、ホストマザーが「最高の経験になったと願ってる。あなたは素敵な女の子だよ。何か辛いことがあっても私達を思い出してね。」と何回もハグをしてくれたことは、私の一生の宝物です。

さて、ミュンヘン観光はドイツ最古の仕掛け時計があることで有名なマリエン広場からスタートしました。そこから各自、自分の行きたいところへショッピングをしに回りました。私はマリエン広場の近くにあるデパートで、友達や家族へ買いそびれていたお土産を買うことができました。

(高田 鈴)



7月31日 帰国報告会

私達、守谷市青少年海外派遣団は7月31日にドイツに別れを告げ、ある種の安堵、または喪失感とともに息をつく間もなく守谷市へと帰ってきました。そして、守谷市役所大会議室での帰国報告会に出席しました。「一回り大きくなった。」「自信のついた表情をしている。」私達は報告会の最初に松丸市長と小川会長からこのようなお言葉を賜りました。

そのお言葉の通り、海外派遣を終えた私達の中に以前と同じ顔をしている者は皆無でした。全員が自分自身の体験を自らの言葉で報告していく。経験を能力、技術へと還元するため、一週間を噛みしめるようにじっくりと。私達にとってドイツでの一週間が常識の破壊であるならば、この報告会はその再構築でした。そして何よりも喜ばしいことに今期派遣団は秀抜で、言葉を紡ぎ他人のみならず自身に追体験させるという作業の重要性を誰もが理解していました。その意味でこの上ない報告会だったと言えると思います。

(森 基思)



8月9日 事後研修

次に私達が集ったのは事後研修が行われた8月9日でした。事後研修では、団長や市職員の方達が各々の経験に基づいて様々な視点でお話をしてくださいました。しかしながら、私はその根底にある私

達中高生に大人が伝えたいことは同じなのではないかと感じました。そしてそれは、「次」なのだと思います。全く接点のなかった10人が出会い、一つのチームとなって姉妹都市であるマインブルク市を訪れ一週間を過ごす。この「始まり」の経験を「次」につなげてほしいと誰もが期待しているのだと思います。「次」の旅、「次」の交流、「次」の挑戦、なんだっていい。ただ決して絶やすことがないように。この事業をきっかけに少し広がった私達の世界を今度は私達自身の手で広げていくこと、それこそが私達への期待に応える最大で唯一の方法でしょう。

最後に、第二の家族と素晴らしい思い出、これからを生き抜くための新しい常識、そして「始まり」を私達に与えてくださった、守谷市とマインブルク市、MIFA、そして家族への深い感謝の念をもって拙文を締めます。

(森 基思)

派遣団員報告書

前田 陽輝
向井田 里那
今泉 穂海
蛸原 まのあ
阪口 千結樹
長谷川 優樹
高田 鈴
吉田 伊織
森 基思
菅原 由羽

宮本 敏弥（団長）
石塚 雅大（引率者）



守谷市立
けやき台中学校
1年 前田 陽輝

ドイツで挑戦したこと

僕はドイツで英語だけでなく、ドイツ語でも話そうと挑戦しました。しかし、ネットで調べて話そうとしても難しく引がかかってしまい、結局英語で会話をしました。

フェアウェルパーティでは、サンキューメッセージをドイツ語で伝える事に挑戦しました。しかし、早口で話さないといけなかったため、同じところで5回も言い直しました。でも、心からの感謝の気持ちをドイツ語で伝えることができてとても良かったです。

ホストファミリーの紹介

お世話になったホストファミリーのフィヒトナ家は、父のヘルムートウ、母のクリスティーネ、兄のマクシミリアン、弟のフェリックスの4人家族でした。祖父母もとなりの家に住んでいて、祖父はマクシミリアンと僕と一緒にサッカーをしてくれました。

ホストファザーは今、市の議員と学校の先生、そして来年は市長選挙に出る人で、とても忙しそうでした。そんな中でも優しくしてくれました。

ホストマザーとフェリックスはドイツ語しか分からず、自分もドイツ語が何も分からずに質問する中、マクシミリアンはグーグルの翻訳で日本語に直してくれたので、楽しく生活することができました。

ホストマザーはとても親切にしてくれました。城に行く時など、遠くに行く時はサンドイッチを作ってくれたり、飲み物を多く準備してくれました。

フェリックスは自分のために準備の手伝いをしてくれたり、場所を教えてくれたりしました。

僕のホストファミリーはとても優しく、親切でした。

大変だったこと

大変だったことは、サンキューメッセージを事前に英語で準備しておいたのですが、ホストマザーとフェリックスがドイツ語しか分からないことを知って、急いでドイツ語に訳して、別の紙に読み方を書いたことです。

また、英語とドイツ語での会話が難しく話膨らまず、1日に会話する回数が少なくなってしまう、質問ばかりの1日がとても多かったので、失敗したと感じました。



忘れられない大切な思い出

今回のドイツ海外派遣の面接に合格したのを見て、こんな自分で大丈夫なのか、英語は話せるのかと心配でした。でも、マインブルクに着き、ホストファミリーに会ってから心配がなくなっていました。

生活上でびっくりしたのが、ご飯の量です。朝はパン一つ、昼はなし、夜は自分の食べきれない量が出てきてびっくりしました。ドイツの人々は、よくこの量で生きていけるなと思いました。

移動中に気になったことがたくさんあります。ドイツは日本と違い信号が少なく、曲がり角も少ない代わりに、ラウンドアバウトが多くて驚きました。また、高速道路では速度無制限ということは知っていましたが、無料だったので驚きました。

ホストファミリーと2日間を終日過ごす事になってから、不安と緊張が出てきましたが、2日目の朝にフェスティバルに行って、引率の石塚さんや仲間みんなに会えてから不安や緊張がなくなりました。

ドイツで一番楽しかったのは、4日目の土曜日です。この日はミュンヘンにあるBMWの博物館に行ってきました。中はとても広く、モーターやスポーツカー、バイクなどがたくさん展示されていました。また、バイクレースのゲームもありました。

フェアウェルパーティや学校に行く時は自転車でした。ドイツで自転車に乗るとは思わなかったので、びっくりしました。自分が借りた自転車はトライアスロンで使う自転車みたいだったので、とてもカッコ良かったです。

帰国の日は空港に行く前に、ミュンヘン観光をしました。最後の約2時間はホストファミリーと楽しく過ごすことができました。お昼ご飯はドイツのマクドナルドで食べました。日本と変わらない味で、おいしかったです。帰りの飛行機は、行きの飛行機より時間が過ぎるのがとても早く感じました。羽田空港に着いて、もう終わりかと思ったら気が緩みました。

今回の旅でドイツの人や生活にふれて、様々なことを学べ、とても充実した日々を過ごすことが出来て良かったです。ドイツ語を勉強し、もう一度マインブルクに行って今回の旅を思い出しながらホストファミリーに再会したり、観光などをしてもっともっと楽しみたいです。





茨城県立
並木中等教育学校
2年 向井田 里那

ドイツで挑戦したこと

私はドイツで、できるだけ外国語で話す事を心掛けてみました。外国語で書くことには比較的慣れていたのですが、それを話すことにはあまり自信がありませんでした。しかし、そこで迷っているのはコミュニケーションが取れないと思い、とにかくまず声にしてみました。最初は少し緊張しましたが、緊張がほぐれると徐々にスムーズに話せるようになり、ホストファミリーと意思が通じて嬉しかったことを覚えています。まずは挑戦してみて良かったと思いました。

ホストファミリーの紹介

お父さんのヨーハネス。とても優しく私を迎え入れてくれました。休日には、バーベキューのグリルを使って美味しい料理を振る舞ってくれました。

お母さんのマディ。私の事を一番気にしてくれていて、「No stress.」と言ってくれました。一緒にオーケストラなどの音楽について話しました。

ホストブラザーのローマン。ゲームが得意で、面白い人でした。

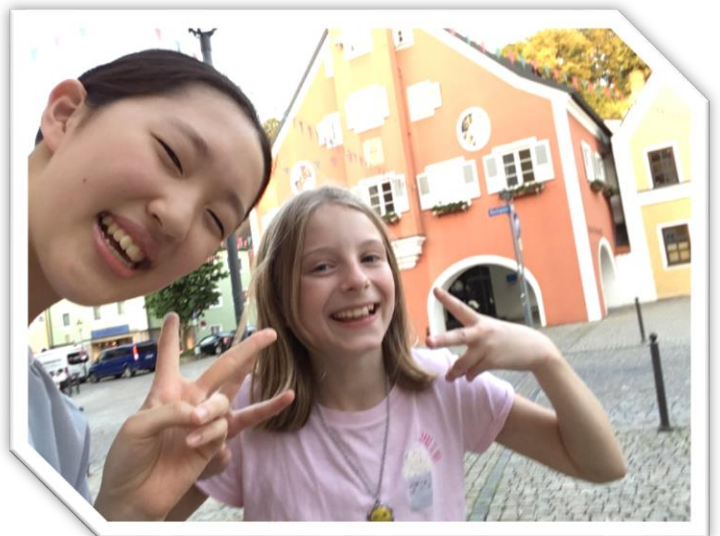
ホストシスターのオリビアとシエナ。オリビアはとても穏やかな性格の長女です。彼女はアニメが好きだったので、よくアニメについて話しました。次に、次女のシエナ。シエナは私に様々な事を経験させてくれました。私が困っている時や楽しんでいる時に、一緒に過ごした大切な友達です。

優しい家族に恵まれてとても楽しかったです。



大変だったこと

私が1週間過ごす上で大変だったのは、レストランでのメニューです。スペルは英語と似ているものが少しあったものの、分からないものが多かったです。そのため適当に選んだところ、思ったものより量が多く、食べ切れませんでした。もし、もう一度行く機会があれば、今度は事前にきちんと調べておこうと思います。また、それらの料理は2人で食べると丁度良い大きさだったので、2人で食べるのもいいと思いました。



海外派遣を通じて

今まで海外への旅行は家族としか行ったことがなかった私。最初に母から「海外派遣に参加してみたら？」と言われるまでは、ドイツにホームステイする機会が守谷市の中高生にあるということを知りませんでした。

“知らない事はとりあえずチャレンジするタイプ”の私は、海外派遣に興味を持ち、応募する事にしました。応募者は多数いて受かるか不安でしたが、無事合格できました。派遣者が決まった後は、団長と派遣者で作られたグループで、私達が企画を作りあげていくので、みんなが情報を発信・受信していく必要があると思いました。

最初の研修で私以外の一緒に行く9人と会い、話をしました。みんなとても良い人達だったので、楽しい派遣になりそうだなと思いました。その後の研修では、チームで協力する事が必要なゲームや文化について学習しました。どれも新鮮で面白かったです。

そうして色々と考えているうちにドイツへ行くこととなり、1週間楽しくホームステイができました。住んでいる国が違っても、外国語を通じて話せた事に達成感を感じ、視野が広がったと思います。貴重な体験をすることができました。ありがとうございました。





守谷市立
御所ヶ丘中学校
2年 今泉 穂海

ドイツで挑戦したこと

私は、自分から積極的に英語やドイツ語でコミュニケーションをとることに挑戦しました。そして、「ありがとう」や「こんにちは」などの簡単な単語は、事前研修で習ったドイツ語で話すようにしました。言いたいことがあっても、完璧な文章が思い浮かばない時がほとんどでした。その時は、単語だけを並べて伝えたり、ジェスチャーを使って自分の意思を伝えたりしました。

ホストファミリーの紹介

私のホストファミリーは、お父さん、お母さん、娘さんの3人家族でした。そして、猫を1匹飼っていました。お父さんは、初日に会った時、2階にあった私の部屋まで、とても重いスーツケースを運んでくれました。

お母さんは、私を本当の娘のように可愛がってくれました。2日目に料理を作った時、私が調味料をこぼしてしまい「Sorry」と言ったら、お母さんがすぐに「No problem」と言ってくれました。2日目で緊張していた私は、その言葉で心がなごやかになりました。

娘さんは私より1つ年下なのに、私より英語が上手です。なので、私がよく理解できないことがあった時は、私ができるまでゆっくり英語を言ってくれたり、ジェスチャーを使ってくれたり、とても優しくかったです。

大変だったこと

2日目に、sport day という学校行事に参加しました。クラスみんなで色々なことをしました。ドイツの学校は、日本よりもとてもオシャレでした。そこで私はのどが渴いたので、ホストファミリーからもらったペットボトルを開けました。普通の水かと思って普通にあげたら、中身は炭酸水でペットボトルから炭酸水が溢れてしまいました。自分もビックリしたし、クラスの間みんなもビックリしていました。



まさか私が！？

合格通知の手紙が来る日。私はまさか自分が合格しているなんて思ってもいませんでした。そのため、「どうせ不合格だろうな…。次、頑張ろう！」と、封筒を開けました。そうしたら、合格と書いた手紙があり、自分でも本当にビックリしました。見た瞬間涙がでてきて、泣きながら大声で「やったー！」と叫んでしまいました。

事前研修では、ドイツ語を習ったり基本的なマナーを学んだり、すごく楽しかったです！ホームステイの中で、一生にもう体験出来ないような貴重な体験がたくさん出来ました。

初日は疲れて、すぐに寝てしまいましたが、次の日の朝「Good morning」と言ってホストマザーとホストシスターが起こしてくれました。

一緒に折り紙をしたり、料理をしたり、お出かけしたり、すごく楽しかったです！折り紙は家族全員で鶴を折ったりハートを作ったり、とても良い思い出です。フットボールやテニスもしました。たくさん笑いあった6日間でした。

私は今回のホームステイで、自分の視野を広げることができました。私を受け入れてくれたホストファミリーには感謝しかありません。この6日間は、生涯忘れることはありません。



ドイツで挑戦したこと



守谷市立
愛宕中学校
3年 蛸原まのあ

私は積極的に会話すること、簡単な挨拶はドイツ語ですることの2つに挑戦しました。

日本で友達や英語の先生と会話するとき、私は話したいことについて正しい文を頭の中で作ってから話していたため、会話が長く続きませんでした。そのため、ドイツでは単語を並べるだけでもいいからとりあえず英語を話し、リアクションも大きくするように心がけました。

また、ドイツの人々はとてもフレンドリーで、私がドイツ語を話せないとい知ると、英語や日本語で話してくれて、私が「Tschüss!」（じゃあね）や「Danke schön」（ありがとう）と言ったら笑顔で返してくれて、とても嬉しかったです。

ホストファミリーの紹介

私のホストファミリーはビーコフ家です。

お父さん、お母さん、娘の3人家族でとても仲が良く、愛に溢れた明るい家庭です。

お父さんのアレクサンダーは、とても優しく物知りです。どこかに行く度に、私に色々なことを教えてくれたので、勉強になることが多かったです。いつも私のことを気に掛けてくれました。

お母さんのイリナは、明るく料理上手です。朝早くから私たちのために、たくさんの朝ごはんや軽食を作ってくれました。私の体調があまり良くない時にはそっと抱きしめてくれたり、背中をさすってくれたり、とても安心感があり、本当のお母さんのようでした。

ジェシカは同い年とは思えないほど大人っぽくて、ギャップがあり、面白かったです。去年守谷に来たことがあり、私の家にホームステイしました。その時から変わらない姿で、1年分のお互いの出来事をたくさん話しました。隣にいて笑いが絶えず、女子力の高さや、たくさん食べるころには改めて驚きました。

空港での再会のハグ、そして別れのハグはとも印象に残っています。

大変だったこと

大変だったことは、買い物をする時にお金の出し方が分からず、細かいコインの計算が出来なかったため、大きい金額のお札に頼ってしまい、お財布の中がコインでいっぱいになってしまったことです。

コインは残ってしまっても日本円に変えられないので、友達やホストファミリーに聞いたり、事前に調べておいたりして、もっと効率よく使えれば良かったなと思いました。

失敗したことは、断りきれず食べすぎてしまったことです。

私のホストファミリーはよく食べるため、3時のおやつにお肉やポテトが出てきました。私はお腹いっぱいでしたが、「食べる?」と聞かれ「What's this?」と聞くと、ドイツやロシアなどの食べ物で、日本では食べられないものが多かったのてつい食べてしまいました。その後、バスでの長時間の移動で、道がデコボコしていたので酔ってしまい、たくさんの人に迷惑と心配をかけてしまいました。それならば、きちんと断れば良かったと反省しました。

そうすることで、心配をかけたりせず、楽しく過ごすことができただろうと思いました。

自分を変えてくれたドイツでの1週間

私はこれが5回目の海外でした。しかし、今回はいつもなら当たり前のように準備してくれて、欲しいものを買ってくれて、私が困っている時に手助けしてくれる“家族”という存在がいませんでした。自分1人で全てやり、困っている時に助けてくれるのは友達やホストファミリーです。話す言葉は英語やドイツ語で、何もかも初めてで新しい環境でした。

ドイツに行く前は、不安な気持ちと楽しみでワクワクしている気持ちが混ざっていました。1週間という長い間、家族と離れて生活するのは初めてで、寂しくて、ちゃんとコミュニケーションがとれるか心配でした。そんな私の気持ちを安心させてくれたのはジェシカでした。空港で目が合った瞬間、走ってきて私の事を強く抱きしめてくれました。バスの中でも隣ですっと笑顔で話してくれて、1年ぶりに会えたのがとても嬉しくて、これからの1週間が楽しみになりました。

ホストファミリーとは学校に行きました。学校では日本との違いを色々な場面で感じました。私が行った学校はとても大きく、迷子になりそうでした。クラスメイトはとてもフレンドリーで、教室に入った瞬間「Hello!」と声をかけてくれました。握手とハグをした後に「私達はもう友達だよ」と言われた時はとても驚きましたが、凄く嬉しかったです。

他にはショッピングやお祭り、ローテンプルクやニュルンベルクに行きました。ハリボー（グミのお菓子）の種類の多さに驚いたり、アトラクションの危なさに怖くなったり、見るもの聞くもの感じるものが全て新鮮でした。

ドイツに着いてからの夢のような時間はあっという間に過ぎ、フェアウェルパーティの日になってしまいました。みんなのホストファミリーと一緒にやった伝言ゲームはとても楽しく、笑いが絶えませんでした。伝言ゲームで盛り上がることができ、みんなで頑張って準備して良かったと思いました。ですが、ジェシカやイリナに手紙を読んでいる時、それまでの思い出が頭の中に蘇り、涙が溢れてきました。その後は夜ご飯を食べ、みんなでワイワイはしゃいで楽しい夜になりました。

ジェシカとの約束が叶った1週間。そして、自分への課題が見つかった1週間になりました。積極席に話すこと、遠慮せず気持ちを素直に伝えることの大切さを学ぶことができました。自分の将来のためにも、この経験が無駄にせずこれから活かしていきたいと思います。

また、今回私がとても強く感じたのは、国や肌、髪の毛の色、言語などが違って人と人は仲良くなれるということです。人生の中で1週間なんてとても短い間だったけれど、たくさんの友達ができました。また、自分では不可能だと思っていたことにも挑戦し、努力すれば必ずできるということを、身をもって体験することができました。この気持ちを忘れずに、これからは色々なことに挑戦して、自分の世界を広げていきたいと思います。





茨城県立
並木中等教育学校
3年 阪口 千結樹

ドイツで挑戦したこと

私がドイツで挑戦したことは、なんでも楽しむことです。普段は怖がりで何をするにも躊躇してしまうのですが、今回の派遣では「やってみる？」と言われたことはすべて「はい！」で返事をする“Yes man”になるようにしました。「やってみる？」と言われた1つ1つがとても楽しいものでした。日本でやるのとは全然勝手が違うものばかりで、事前研修で言われた「違いを楽しむ」ということを実践できました！

ホストファミリーの紹介

私のホストファミリーはマルクス、シュロッサーファミリーで、とても優しくて、私を温かく迎えてくれました。全員の仲がとても良く、常に笑顔の絶えない家族でした。

ホストシスターのアントニアは笑顔が素敵で、私にたくさん話しかけてくれました。

ホストファザーのディーターさんはとてもフレンドリーで、たくさんのことに挑戦させてくれました。

ホストマザーのミヒャエーラさんはいつも笑顔を絶やさない方で、ミヒャエーラさんが作ったクロワッサンやさくらんぼはとても美味しかったです。

もう一人のホストシスターのマレーネさんは、私を街やお城に連れて行ってくれたり、湖に連れて行ってくれたりしました。マレーネさんの運転する車はとても速くて楽しかったです。

ホストブラザーのセバスティアンとは、ボードゲームやWiiをしました。少ししかお話できませんでしたが、とても楽しかったです。

一番上のお姉さんのヨゼーファさんには会えませんでした。とても優しく、おもてなしをしていただきました。

大変だったこと

私がドイツで1番大変だったことは、車酔いです。ドイツではバス移動が多かったのですが、ドイツの乗り物は日本より速い上によく揺れるので、乗るたびに酔い止めが欠かせませんでした。酔い止めを飲んでも、それを上回る吐き気に何度も心が折れそうになりました。

また、ドイツの飲み物はほとんどが炭酸水だったので、普段炭酸を飲み慣れていない私はお腹が膨れてしまって、せっかくの美味しい料理をあまり食べることができませんでした。



あっという間の1週間

この事業を初めて知ったのは、去年の春に母から広報を見せてもらったときでした。「応募してみたら？」と言われ、私自身海外にはとても興味があったのですが、私は日本から出ることがなく、他のお家に泊まったこともなかったために怖さが勝ち、アメリカのグリーリー市への事業には応募しませんでした。ですが、グリーリー市への海外派遣事業の応募を見送った後も、自分の中で本当に挑戦しなくて良かったのかとモヤモヤとした気持ちが残りました。1年間悩み続けて、どうせなら悔いのないようにしようと思い、ドイツ・マインブルク市への海外派遣事業への応募を決めました。面接を通った後、ほぼ毎週あった研修ごとに団長やメンバーとの交流が深まっていき、出発前には「これならどんなことがあっても乗り切れる!!」と思えるまで皆との絆ができました。

ドイツに到着してからは、本当に温かくホストファミリーが歓迎してくれました。1年前から続いていた不安はほんの杞憂に終わりました。私のホストシスターだったアントニアはとても優しくて、1週間の間、沢山のことを手伝ってくれました。また、マインブルク市に住んでいる人やアントニアのクラスメイトもとてもフレンドリーで、すれ違いざまに手を振ってくれたり、英語で気軽に話しかけてくれました。私の拙い英語でも根気よく聞いてくれて、とても嬉しかったです。

ドイツに着いてからの1週間はとても短くて、実際は3日くらいしか居なかったのではないかと思います。毎日が新しい事の積み重ねで、夜になると気絶するかのように寝てしまったので、次の日の朝に急いでシャワーに入ることも珍しくありませんでした…。ホストファミリーのお家を出る最後の夜、星空の下で焚き火のようなことをしながらホストファザー、ホストマザー、アントニアとお話しました。「国も言葉も髪の色も違う私達が今ここにいることが大切。」ホストマザーが言ってくれたその言葉を忘れずにいたいと思いました。日本から出たことがなくて、本当に外の国に人が住んでいるのかも知らなかった自分が、8000kmも離れている国の人と一緒にいて、同じ景色を見ている。そのことがとても特別に感じました。これからも、この特別な縁を大切にしていきたいです。





守谷市立
御所ヶ丘中学校
3年 長谷川 優樹

ドイツで挑戦したこと

短くても良いので、できるだけ早く相手に気持ちを伝えられるようにしました。私は昔から誤解されることが多く、そのせいで苦労することもありました。そのため、とにかく分かりやすく伝えるために、ジェスチャーなどを使って指し示しながら話しました。

分からなかった単語を繰り返すとホストファミリーが教えてくれて、語尾を上げるだけでも疑問文として伝わります。そういうふうに、予定もこまめに確認しながら、自分の管理能力を伸ばして向上させることに挑戦しました。

ホストファミリーの紹介

私の2つ下で13歳のエマは優しくてしっかりした子で、いつも私はエマに案内をしてもらいました。エマは英語が上手で、私の知らない単語を他の言葉で説明してくれました。エマと双子のベンヤミンはテニスが好きで、他のホストファミリー達と食事を取った際に guess what という、日本でいうものまねゲームをした時に、面白いことをして笑わせてくれました。エマ達のお姉さんのアイリールとはあまり一緒に行動できませんでした。写真の撮ってもらった時、とても上手に撮っていて感動しました。その後話した時に、ジャーナリストを目指していることを知りました。ホストファザーのマクシミリアンは私たちでも分かりやすい英単語を使って話してくれました。ホストマザーのエズレムは、意味がよく分からないような私の質問も理解して説明してくれたり、休みをこまめに取ってくれたり、私達をすごく気遣ってくれて、それでいて家族のように接してもらいとても嬉しかったです。

皆、私が怖がっていることも後押ししてくれて、ホームステイの良い思い出となりました。

大変だったこと

ホストファミリーとの時間は、全くと言っていいほど苦労がありませんでした。それほど彼らが優しくあったのもあり、まるで本当に家にいるかのようにくつろぎ方ができました。休みをたくさん取ってくれたことも、その一因だったのかもしれません。

会話をするときも、興味を持ったことや「こんなことがあったよ」ということを言ったり、写真を見せて日本での生活を教えたりなど、簡単にコミュニケーションが取れたと思います。皆、難易度の低い文法や簡単な単語で伝えてくれたので、それもありがたかったです。家族と接する時のように話せば気負うことはないと思います。

ただ私に限っては、ときたま話を聞いていなかったりすることがあるので、それさえ気を付けていれば問題なかったです。普段の自分の行動を考え、気をつけるべきところがあればそこに気をつけられればいいと思います。



もう一つの家族

私は、マインブルクに行くまで不安に感じる事が多々ありました。ですが、実際にマインブルクに行ってホストファミリーに会ってみれば、家族と話しているような、寧ろ家族よりも接しやすいような方々で、とても安心して7日間を過ごしました。「行って良かった」というよりは「帰って来たくなかった、そのままドイツにいたかった」という方が正しいかもしれません。それほどあの生活は、穏やかで楽しかったのです。

ちなみに一つ話をすると、私がドイツに行った理由として、受験勉強から逃れたかったということがありました。しかしそれは現実逃避だけであり、実際ドイツに行っている間、6時間の塾の授業7日分、合計して42時間分、私は後から自分自身で追いつかなければならないのです。それに加えて自習時間を費やしてドイツに行った、ということは差があまりにも開いてくるということです。私は「ドイツへ行って、帰ってくればできるはず」といった怠惰な考えを持っていました。実際そんな訳はなく、私は未だ危機を覚えることをしませんでした。

今はそれなりに勉強をしても全く自覚ができていないところがあり、私の弱さがよく分かる機会となりました。ですが私は、今回ドイツへ行ったことを後悔することはないと思います。人の優しさに触れ、生活、文化の違い、全てを体験して過ごしたあの日々はとても大切で、後悔はおろか今の生活にさえ寂しさを感じます。

ところで苦労したというよりは寂しかったことと言えますが、ずっとお茶がなかったこと、炭酸水続きだったことが挙げられると思います。家族を恋しくなることはなかったですが、日本に帰ってきた空港でとりあえずお茶を買って飲んだ時の満足感は、なかなかのものでした。

写真を撮ることを忘れかけていたのは、ちょっと危なかったと思います。ドイツでやらなければならないことを最初の日に確認しておくよかったのかなと思いました。とにかく、ドイツに行ったことで視野が広がったのは、良い経験だと思いました。





茨城県立
下妻第二高等学校
1年 高田 鈴

ドイツで挑戦したこと

私はこのホームステイで、自分がワンランク成長できるような少し高い目標を立ててみようと考えていました。そこで私は、悩みに悩んだ末「自分から話しかけ、話を広げる」という事を目標に決めました。初めはホストファミリーの方と会話をする事に対して少し不安もありましたが、一緒に泊まることになった派遣団員の長谷川さんがいたおかげで、ホストファミリーの方々の前でも緊張することなく、自分からたくさんの事を情報交換することができ、ドイツと日本の違いを学ぶことができました。国際交流員のルイーザさんから教わったドイツ語にも挑戦しました。

ホストファミリーの紹介

ラウ家は5人家族です。ホストファザーのマクシミリアンはとても優しい人でした。彼はお仕事で、私達と一緒に過ごせる時間は限られていましたが、夕食の時は必ず一緒でした。その時は私を気にかけてくれて、沢山声をかけてくれました。ホストマザーのオズレムはとても明るい人でした。彼女は運動が好きでテニスと陸上のサークルに週に2、3回程参加しています。私は陸上部に所属しているので、陸上の話でよく盛り上がりました。去年21キロのマラソンを完走したと聞いた時は、感激しました。エマは初めて会った時は緊張していたのか、静かなイメージがありました。でも私は彼女と共に過ごす時間が一番長かったので、すぐに打ち解ける事ができました。そしてお互いに冗談を言って笑いあったり、一緒にゲームをしたり…。本当はとても活発で明るい女の子でした。ベンヤミンとはなかなか打ち解けることが出来ませんでした。でもある日、他のホストファミリー達も呼んで夕食を食べに行った時に、思い切って私はジェスチャーゲームをしようと提案してみました。すると私のジェスチャーを気に入ってくれて大笑いをしながら「ずっと君の番がいいよ!」と言ってくれたのです! 本当に嬉しかったです。アイリーンはプロカメラマンでした。そしていつも私を助けてくれました。例えば深夜に鼻血が出た時、普段めったに鼻血が出なくて焦っていた私に、わざわざ起きて急いでトイレットペーパーを渡して、私の鼻血が止まるまでそばにいてくれました。

大変だったこと

過去の先輩団員から聞いていたのですが、表記を理解する事がやはり一番大変でした。例えば日本では駅、商品、看板などの日本語表記の近くに、英語や韓国語など複数の他国語が書かれていることが多いと思います。しかしドイツでは、ドイツ語のみの表記が多く、写真がないドイツ語だけで書かれたメニューやお土産を選ぶ際に、毎回ホストファミリーにどんな意味なのか聞いていました。ホストファミリーとコミュニケーションを取れるチャンスではありましたが、その反面、知らない英単語や聞き慣れない英単語を多く使った説明だったので、理解するのに苦労してしまいました。



最高の思い出

今回マインブルクにホームステイをすることになったきっかけは、母の勧めでした。私は以前から、学校のホームステイへの勧誘の手紙をもらっていました。その度に「ホームステイやってみたいなあ」という願望があり、海外へ行くことに密かに憧れを持っていました。そのため、少ない枠の中で面接に受かったと聞いたときは、心から嬉しかったです。事前研修を重ねるうちに、最初はあまり会話できていなかった派遣団員の仲間とも、少しずつ打ち解けるようになり、出国の日を楽しみにしていました。

「楽しみだな」と思う反面「少し不安だな」と思っていた事もありました。それは「きちんと理解をしながらコミュニケーションをとれるのか」という不安です。ドイツの母国語は英語ではなくドイツ語です。私達とは英語で会話をしてくれるということは聞いていました。でもインターネットで調べたところ、私の見たサイトでは、ドイツの子供が英語を勉強するのは中学生からが多いと書いてありました。私のホストシスター達は13歳だったのです。「まだ英語をあまり勉強していないのではないか」と不安でした。でもいざ会ってみると、すらすらと英語を話すことができ、衝撃を受けました。私はつい「なぜあなたはそんなに英語をうまく話することができるの？」と聞きました。すると私のホストシスターは、英語の勉強を始めて2年目だけど、学校では日常生活で英語を使わなければならないと答えてくれました。私は、普段から母国語ではない言語を使う事は大変だけれど、その言語の力は確実に上がるのだと思いました。

私はホームステイから帰った後、ドイツ語を勉強したいと思いました。ドイツ語を勉強して、ホストファミリーと直接会って、また話したいです。そして成長した自分を見せたいです。

沢山の経験、学び、思い出を作ることができたマインブルクにいた1週間は、私にとって最高の思い出です。最後に、顔も言語も文化も違うけれど、出会ってこのように沢山の方々と繋がることが出来たこの経験を、今後に生かしたいです。ありがとうございました。





茨城県立
取手松陽高等学校
2年 吉田 伊織

ドイツで挑戦したこと

私がドイツで挑戦したことは「楽しむためには自分で楽しむ努力をする」ということです。ドイツに行けるというチャンスを、私は絶対に無駄にしたいはありませんでした。たった一週間を思いっきり楽しみたいと後悔するなと思いました。嫌なことがあっても、それを笑い話にできるくらいのポジティブシンキングで明るくしようと心に決めていました。いざ現地に着いたら、あっという間に時間が過ぎてしまいました。でも確実にわかるのは、たくさん笑って心から楽しむことができたということです。ホストファミリーとの何気ない会話。みんなと観光したこと。全てすごく楽しかったです。身振り手振り、知っている単語をフル活用してみんなと会話できる楽しさは、自分から話しかけていかないと感じられなかったと思います。観光でも、歩くのが大変な時もありましたが、みんなで「頑張ろう!」と声をかけていたので、疲れなんて忘れられました。頬が痛くなるくらい毎日楽しく笑っていることができました。このようにいられたのは自分の努力もそうですが、常に一緒にいてくれたホストファミリー、現地で出会った方、派遣団員のみんなのおかげです。心から感謝しています。

ホストファミリーの紹介

私のホストファミリーは母のマドレーヌ、父のヨーハネス、私と同年の娘のオリビア、一つ年下の息子のローマン、12歳の娘のシエナの5人家族です。ファルケ家はとても親日家で、みんな心優しく笑顔あふれる家族でした。お父さんは仕事が忙しいようで、休みの日や朝早い時間しか会えませんでした。お父さんの作ったBBQの料理は世界で一番おいしいと思います! 弟のローマンも8月に試験を控えていたようで、自分の部屋で勉強していたため毎日とは会えませんでした。ローマンはとても優しく、笑顔が素敵な弟でした。私には男兄弟がいないので、ローマンは本当に弟のような存在です! お母さんとオリビア、シエナは毎日一緒に行動してくれました。家族との会話は英語ですが、お母さんは積極的に日本語で話しかけてくれました。すごく優しくて明るいお母さんでした。

シエナも「カワイイ!」「どういたしまして〜」など、日本語で毎日話しかけてくれました。シエナの笑顔が私は大好きです! 今はシエナのハグがとても恋しいです。オリビアは学校などで、周りがドイツ語で話していることを英語で私にわかるように訳してくれました。お母さんに似てすごく楽しかったです。私達は双子のようになった気がします! みんなとは数えきれないほど毎日ハグをしました。本当に優しくて、心の底から感謝しています。私にとって大切な家族です。

大変だったこと

特に大変だったことや困ったことはありませんでした。ホストファミリーの方がいろいろ気にかけてくれたので、何不自由なく過ごすことができました。ただ、フェアウェルパーティで大号泣してしまい、マインブルク市長に心配されたことが少し恥ずかしかったです。

出会えた奇跡

私はドイツに行って、多くのことを経験しました。たくさんの人が私達を温かく迎えてくれ、ドイツに行って人の優しさに触れることができました。ミュンヘン空港でホストファミリーに会い、その瞬間お互いを抱きしめました。日本ではハグをするという文化は、あまりありません。その時驚いたと同時に温かさを感じました。空港で会った時から、オリビアは私の手を離さないでいてくれました。それはきっと、私が緊張しているように見えたからかもしれません。おかげで私はすぐに仲良くなれたように感じました。バスの中でもたくさん話しかけてくれて、初日の歓迎パーティーでも隣にいてくれたので、とても心強かったです。

2日目、3日目は私がものすごく楽しみにしていたプランでした。それは、オリビアの通っている学校に行くことです。ドイツに行く前からクラスの写真や動画を送ってきてくれて、雰囲気は何となくわかっていました。当日クラスに入ってみたら、みんなすごくフレンドリーに笑顔で接してくれて、すごくうれしかったです。2日間しかいなかったのに、最後にお別れするときはもっとこのクラスにいたいな、もっとたくさん話したいなと思いました。みんなと卓球をしたり、ピザを作ったり、本当にかげがえのない思い出になりました。私は、海外の子供たちが通っている学校に行ってみたくてずっと前から思っていたので、夢が叶ってよかったです。私はみんなのことを一生忘れません。またみんなに会いたいです。幸せな時間を過ごすことができました。前々からいろいろと考えてくれていたオリビア達と、素晴らしい思い出が作れたことに感謝しています。

ドイツで出会った人はみんなとても親切で、どこまでも優しい方々でした。ホストファミリーは私のことを、本当の家族のように受け入れてくれました。みんなと出会えた縁を、これからもずっと大切にしていきます。このような経験ができたことを、すべての人に心から感謝します。最後に、ホストファミリーのママ、パパ、シエナ、ローマン、オリビア、みんなのことが大好きです。





茨城県立
並木中等教育学校
5年 森 基思

ドイツで挑戦したこと

私はドイツの伝統的な食事に挑戦しました。その食事とはヴァイスブルスト、白いソーセージのことです。私は、一般的な食べ方と伝統的な食べ方の両方に挑戦しました。横に切れ目を入れて皮をうまく剥がして食べるのが一般的な食べ方で、端から中身を吸い出して食べるのが伝統的な食べ方です。私には伝統的な食べ方の方が美味しく感じました。そして、私はこの挑戦を通じて、ドイツの食文化の一端を理解することができました。

ホストファミリーの紹介

ホストファザーのロベルトは、温厚で優しい性格の方です。また、トランペットの達人で、フェアウェルパーティではアンドレアと一緒に鼓笛隊の一員として素晴らしい演奏を披露してくれました。

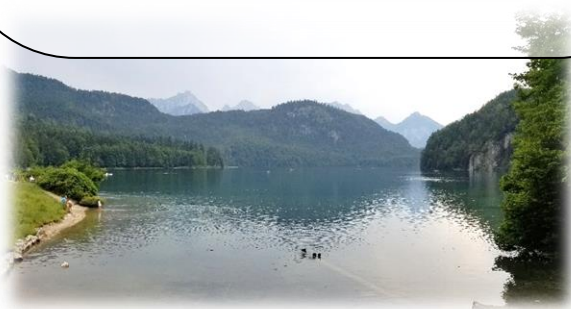
ホストマザーのアンドレアは、「母は強し」を体現したような方です。ホームステイで私に発生した問題の数々を解決してくれました。そして、彼女の母親でマインブルク市の副市長でもあるハネローネさんも、私に優しくしてくれました。

一人目のホストブラザーのベネディクトは、ロベルトに似た優しくて面倒見の良い兄です。学校に向かうバスの中でドイツの文化について詳しく教えてくれました。実際には私のほうが歳上なのですが、私は彼を兄として頼りにしていました。

二人目のホストブラザーのアンドレアスはスポーツが大好きな弟です。彼のテニスの試合を見たときは、ルールがいまいち分からない私にもその腕前が伝わってきました。

大変だったこと

私はドイツで体調管理に苦労しました。長時間のフライトと、現地での予想外の高温多湿に見舞われて体調を崩し、ウェルカムパーティにはほとんど参加できませんでした。その後も、水が合わずにお腹を壊したりしましたが、そのときには日本から持っていった市販薬が役に立ちました。もし今度、旅行をすることがあれば、予想外の事態にも対応できる準備を、ソフトとハードの両面で整えるようにしたいです。



"Taten sagen mehr als Worte"(行動は言葉より多くを語る)

私はこの海外派遣事業で非言語コミュニケーションによる異文化理解、及び自文化発信に挑戦し、納得のいく成果を収める事ができたことをとても嬉しく感じています。具体的には、ボディランゲージと手記、そしてボードゲームがその主な手段でした。

まず、ボディランゲージについては、それを用いて英語でのコミュニケーションを補う事ができました。お互いに母国語ではない英語での会話を円滑にしたのは、表情や仕草であったと感じています。また語学力ではなく、気まずさや躊躇いがコミュニケーションの障壁となる場合にもボディランゲージは有効でした。パーティーで疲れて帰りたくなってしまったときに私が家に帰れたのは、少しオーバーに疲れた仕草をしてみせたからだと思います。

次に、手記については、それを用いて自文化の紹介を詳しく行うことができました。日本の料理を紹介するために写真を用意しましたが、ドイツの学生が料理の素材について質問をしたので少し困りました。そんな時、役に立ったのが手記でした。ペンさえあれば即座にコミュニケーションを取れる、文字だけでなく絵を描くことでイメージを伝えることができるといった点が、咄嗟の場面で便利でした。

そして、ボードゲームについては、それを用いて異文化を理解し、急速に良好な人間関係を結ぶことができました。そもそも、ドイツは世界有数のボードゲーム大国です。ドイツ年間ゲーム大賞はボードゲームの最も権威ある賞として知られています。まるで、サッカーや野球といったスポーツが言語の壁を超えた交流を実現するように、ボードゲームはコミュニケーションツールとして機能しました。また、ホストファミリーとお互いの国のボードゲームを紹介し合ったことは、非常に高度な異文化交流であったと私は思います。

最後に、私はこれらの非言語コミュニケーションの経験を通じて、今後は英語圏ではない文化を含む世界中の人々と交流をしていきたいと考えています。





あずさ第一高等学校
3年 菅原 由羽

ドイツで挑戦したこと

今回ドイツに行って、初めて教会の中に入りました。キリスト教徒ではない私が足を踏み入れるのは緊張しました。ステンドグラスが大きくてカラフルで、言葉が出なかったです。古い教会だと歩く度に床の音が鳴るので、歴史ある建物が多く残っていて素敵だなと思いました。私のホストファミリーはキリスト教徒でしたが、彼らは日本人がみんな仏教徒だと思っていたようで、宗教についての感覚の違いがハッキリと分かってとても興味深かったです。

ホストファミリーの紹介

私のホストファミリーは5人家族でした。パパ、ママ、長男のアントン、長女のテレサ、次女のソフィアです。

パパは普段農業をしていて、ドイツの畑仕事について詳しく教えてくれました。日本の重機も持っていて、それらの重機や農業という仕事自体にとっても誇りを持っていました。

ママは、いつも私のことを気遣ってくれる、とても優しい人です。英語で沢山話しかけてくれて嬉しかったです。

アントンはたくさんの国へ旅行に行っていて、綺麗な景色やクルーザーの写真を見せてくれました。狩猟や乗り物の免許を沢山持っていて、免許証も見せてくれました。

テレサはマインブルク市の2019年度ビールクイーン(ミス・マインブルクのファイナリストで、PR大使のようなもの)で、地元のお祭りでは民族衣装姿でステージに立っていました。

ソフィアは16歳で、私と歳が近かったのもあり、いつも一緒にいてくれました。去年守谷市に派遣団員として来たことがあり、日本についてたくさんのことを知っていました。また英語がとても上手で、私と他のホストファミリーとの会話がうまく噛み合わない時など、何回も助けてくれました。

大変だったこと

ドイツのマナーや習慣について話を聞く上で、日本のことについてもこちらから説明することがよくありました。現地のアジアンレストランに行った時、日本の宗教に関する置物が沢山あり、それらはどんな役割なのかホストファミリーに聞かれました。私はそのとき上手く答えられず、十分な説明が出来ませんでした。自国の文化についても知っておくべきだなと感じました。



一生の思い出

私は今回の海外派遣が初めての海外でした。以前から海外の文化や生活に興味があったので、派遣団員としてマインブルク市に行けると分かった時はとても嬉しかったです。そして実際に、現地ではたくさんの経験と大切な思い出ができました。

最初に驚いたことは、英語力の差です。ドイツ語が母語であるドイツ人の皆さんは、日本人の私たちよりも遥かに英語を速く流暢に話していました。私は聞き取ることに必死で、最初はあまり話せずにいました。バス移動が多い中、毎回ホストシスターと隣の席だったので、話しているうちに慣れてきました。また、マインブルク市のミス・ビールであるテレサに頼まれてアサヒビール工場へ手紙を書いた時、ドイツ語で考えられた手紙を英語に訳してもらい、それを聞いて日本語の文を書く、ということをしました。かなり大変な作業でしたが、初日の自分には出来なかったであろうことなので、達成感と自身の成長を感じることが出来ました。お互いの話していることが理解出来る、というのはとても貴重なことだと分かりました。

また、この1週間でかけがえのない思い出が沢山できました。アジアンレストランでお寿司を食べたり、大好きなコスメやドイツ語のレシピ本を買いに行ったり、プールに行ったり、お祭りに行ったり、数え切れないほどの最高の瞬間がありました。

特に印象深い思い出は、フェアウェルパーティです。最後の、団員からホストファミリーへのサンキューメッセージで、滞在中の感謝の気持ちを手紙で伝えました。それまでとは空気が変わり、お別れの悲しみからたくさんの人が泣いていました。私は、そのときは恥ずかしくて泣けませんでした。最終日の家を出る時に大号泣してしまいました。

今回、たった1週間でこんなに楽しい時間を過ごせるとは思っていませんでした。行く前に感じていた不安は着いた途端に消えて、終始充実した最高の時間でした。楽しかったのはもちろん、1週間毎日学ぶことが本当に多かったです。頭の中で処理しきれないほど多くのことを経験出来ました。この1週間のことをきっと一生忘れないと思います。そしてまたこんな素敵な体験が出来たらいいと思います。出来る自分でありたいと思います。



マインブルク市の姉妹都市への思い

2019 年 青少年海外派遣事業 団長 宮本 敏弥（守谷市国際交流協会）

羽田から団員 10 名と飛び立った日は、日本も猛暑、ドイツ国内も例年にない暑さが予報される日でした。引率の石塚さんと添乗員の小林さんとの 13 名で 1 週間の旅が始まったのです。送り出してくださる守谷市市民協働推進課のスタッフの皆さんと市長、市の職員の方々、MIFA（守谷市国際交流協会）の会長をはじめ協力を惜しまずアドバイスをくださった会員の方々の心を支えにした旅でした。ミュンヘン空港には、マインブルク市の姉妹都市歓迎の幟がシステムチックに掲げられて、記念撮影に及んだ時は長年の交流の水脈が地下水のごとく流れていることを実感させられました。マインブルク市職員のインゲさんとボランティアのシェーンフーバーさんの連携は見事で、かゆいところに手の届く対応ぶりには恐縮しました。「任せて」は信頼の証でした。姉妹都市の交流を、守谷市とマインブルク市双方が組み合っている構造を、初めて実感しました。無事旅を終えた今は、ただ感謝の気持ちでいっぱいです。

マインブルク市に到着した日は、夕方の日差しが穏やかな時間帯でした。ホストファミリーも何名か空港まで迎えに来てくれました。団員たちは事前にメールやLINE で情報交換をしていたので、すぐに打ち解けていました。ピザを食べながらライザー市長の歓迎のあいさつを聞き、しばしホストファミリーと歓談しました。気が付くと時刻が 19 時、20 時となっても日が沈まないのです。この経験は、人生で初めてでした。団員たちはさしたる驚きも無いように見受けられましたが、20 時を過ぎて散会した後も、市長を囲んで在留外国人のことや市政について談義していました。日独の人権事情にも話が及びました。21 時ようやく暗くなりました。ドイツでは、夕方の時間を戸外で楽しむ文化であることに得心が行きました。泊めていただいたシェーンフーバーさんのお宅でも、この時間帯はウィンターガーデンで素足でワインを飲みながら談話を楽しみました。



マインブルク市では、現在 3 つの都市と姉妹都市関係を締結しています。川沿いの市の広場には、方向と距離を記した標識があります。市民に姉妹都市の地球上の位置を方向と距離で示している、思いを馳せるシンボルなのです。心を形に表していることと、いつも思いを寄せている明示性の愛情の形がドイツの文化だと感じさせられました。



左の写真の広場は、ヨーロッパでも地球温暖化の影響と考えられる豪雨災害で水に浸かりました。川が氾濫したのです。今では綺麗に復興していますが、禍福はあざなえる縄のごとくです。明るく穏やかに過ごしているドイツの皆さんも、悲しみも苦しみも乗り越えてきた人間理解への深い眼差しがあります。

バイエルンは長く一つのランドでした。MIFA が頂いたバイエルン州の紋章に「Freistad」という言葉が書かれています。何かにつけて民族衣装を着る習慣があります。土曜日のビールフェスティバルでも、楽隊の人以外でも民族衣装を気軽に着ている人の姿を見かけました。独立自尊の気風の強い地域です。言葉にも表れています。「ミュンヘン」ではなく「ミュニック」と発音します。歴史的な景観を残しながら、内部は現代の文明の利器を十分に生かした機能的な家庭生活を送っています。田園の広がる地域は、かつての三圃式農業を彷彿させるものがあります。農業を大事にしている国という印象が強く伝わってきます。



フェアウェルパーティーでは、心憎いばかりのホストファミリーの方々のおもてなしが身に沁みました。練習通りにできた団員たちも、自信に満ちた笑顔になりました。それを超える心配りが、伝言ゲームでは感じられました。「団員たちが困らないように7名出て欲しい」と呼びかけがあると、それにきちんと答えてくれるのです。集団主義的な日本の発想と、個人主義の国の違いが感じられた一場面でした。果たして団員は気づいたのでしょうか。

マインブルク側では、アコーディオンの演奏と楽隊の演奏が付け加えられたので、日本側も抹茶のサービスと日本風の伝統的なデザインの布地で装飾して、日本文化を少し楽しんでいただきました。



将来への活躍に期待

2019 年 青少年海外派遣事業 引率 石塚 雅大（守谷市役所 経済課）



引率者として声がかかったとき、最初に考えたことがありました。それは「将来、団員の各々が外国で活躍するためには、今回の派遣研修をどのようにサポートするべきなのだろう」ということでした。案外、その答えは一瞬で出てきました。「まずは団員が大人の存在を忘れて、自分自身が主体となってホームステイをしていると思ってもらえるようにしたい。そのためには、引率は裏方でバックアップに徹するべきだ」との考えを持って挑みました。

その後、事前研修が始まりました。大人の存在を意識させないため、研修中に私から団員には細かなアドバイスを言わないようにしていました。結果としては、そもそもアドバイスを言う必要性がありませんでした。研修の様子を見てい

ると、団員がお互いに話し合い、ホームステイの準備を着々と進めていたからです。至極普通な様子ですが、私は「この団員なら何とでもなるだろう」と妙な自信を感じることができました。

そして派遣が始まるときには、「過去の団員たちもホームステイを経験してきたのだから、この団員たちにできないわけがない」と確信を持って、日本を出発しました。ドイツに着きホストファミリーと会くと、さすがに団員達も最初は緊張気味のようなのですが、その翌日には何の問題もありませんでした。このようになれば、団員が自走していくのも容易に想像ができ、逆に引率者の私が「心強い団員に恵まれたものだ」と支えられたような気もしました。

さて、団員は当然のこと、引率者もホストファミリーのもとへ行きます。私がホストファミリーと過ごす中で驚かされたことは、ホスピタリティです。ホストファミリーであるウィルケさんは、非常に多忙な日々であるにも関わらず、私のことをいつも気にかけてくださいました。そこには、ドイツに来た私に後悔のない経験をさせ



たいという気持ちが溢れていました。さらには様々な方からも、バイエルンの景観や文化、自然環境や農業事情などを教えていただき、日本ではできない新鮮な経験ができ、とてもありがたい気持ちでいっぱいになりました。

団員の様子を見る限り、私と同様に、それぞれのホストファミリーからホスピタリティを感じ、そして新たな経験をしているようでした。団員は、できるようになったこと、できそうだと思うこと、将来やるべきことへの気づきを得られたと思います。私はその団員の気づきを信じ、将来への活躍に期待したいと思います。

最後に、ホストファミリーの方々やご支援をいただいた皆様、団長、団員の皆様、関係機関の皆様、貴重な経験をさせていただきまして、本当にありがとうございました。

マインブルクの新聞に掲載された記事



Junge Japaner zu Gast bei Familien

Eine knappe Woche haben die japanischen Jugendlichen Zeit, die seit Mittwoch bei Gastfamilien in Mainburg und Umgebung untergebracht sind, Bayern und vor allem die Hallertau zu erkunden. Am Mittwoch schon hieß sie Bürgermeister Josef Reiser willkommen, am Donnerstag wurden die Schüler und ihre Begleiter offiziell von Vizebürgermeisterin Hannelore Langwieser in der Hopfenstadt empfangen (unser Bild). Danach ging es weiter nach Vatersdorf zur Firma Leipfing-Bader, wo ein Biohof mit japanischen Koberindern und eine Werksbesichtigung auf dem Pro-

gramm standen. Gestern haben die japanischen Jugendlichen zusammen mit ihren Gastgebern Neuswanstein besucht, den heutigen Samstag und morgigen Sonntag werden die jungen Leute ganz individuell mit ihren Gastfamilien verbringen. Schon am Montag findet dann die Abschiedsparty in der Städtischen Sing- und Musikschule in Mainburg für die Gäste aus dem Fernen Osten statt, bevor sie nach einer Stadtrundfahrt in München am Dienstag wieder das Flugzeug in Richtung Tokio besteigen werden.

Foto: Stadtverwaltung Mainburg

【日本語訳】

日本の若者がマインブルクでホームステイ

水曜日からマインブルクとマインブルク周辺に住んでいる家族の家でホームステイを経験している日本の若者は、これから約一週間バイエルン州（特にハラタウ地方）を回ります。

水曜日はライザー・ヨーゼフ市長が若者たちに挨拶して、木曜日にはラングウィーザー・ハネローレ副市長が「ホップの町・マインブルク」の来客として彼らを出迎えました。

その後、ファーターズドルフにある煉瓦の製造を行っているライプフィンガー・バーダという会社を訪問し、日本の神戸牛が飼育されている有機畜産の農作業場と工場を見学しました。

昨日（金曜日）、ホームステイの家族と一緒にノイシュバンシュタイン城を訪れ、土日はそれぞれのホームステイ先の家族と自由に過ごします。

月曜日は、マインブルクの音楽学校にて、若者たちのためにフェアウェルパーティーを開催する予定です。火曜日は、観光バスでミュンヘンを回ったあと、飛行機に乗って東京に戻ります。

フォトメモリー





保護者の声

団員の保護者の皆様からのご意見・ご感想を紹介します！



どちらかというと日本志向で、人付き合いが得意ではない我が子が、事前研修を通して、自分の知らない環境の友人と出会い、世界を広げ、帰国時は「ドイツに帰りたい」と言うまでになった。大変貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

事前研修を通して、仲間との絆を深めたり、刺激を受けたことで、回を重ねる度に本人も意欲的になりました。多くの経験をするにより、視点を広げることができ、進路を考える際の選択肢も増えたと思います。

初回研修から事後研修までの健康維持・管理が大変でした。また、学校と部活の予定がギリギリまで分からず、研修と予定の調整が大変でした。

その性別ならではの悩みがあるため、同性の引率者がいると心強いです。初めて海外に行く人もいるので、持ち物リストがあると便利だと思いました。

守谷市民、親として、本事業の成り立ちや MIFA（守谷市国際交流協会）の存在など、知らないことが多く、勉強不足なことを痛感しました。この素晴らしい事業が続いて、我が子と同じように後輩が貴重な体験ができるよう、お手伝いできたらと思います。

この年齢で親から離れ、広い世界を体感できたことは、人生の財産になると思います。市のバックアップがあり、安心して送り出せました。私たち家族もホストファミリーと連絡を取り合えて、交流ができたことが良かったです。日本に来た時はぜひ会いたいと思います。



編集後記

今回で 29 回目となった守谷市青少年海外派遣事業。記念すべき「令和」時代初の派遣先となったのは、ドイツ連邦共和国バイエルン州マインブルク市でした。

今年の派遣団員は、中学生 6 名と高校生 4 名からなる個性豊かな団員が集まり、例年話し合いに時間がかかるフェアウェルパーティーの出し物も、高校生を中心に即決して「クラッピングミュージック」を熱心に練習する姿が印象的でした。また、第 2 回の事前研修でリーダーを 1 人選出し、副リーダーは誰にするかという場面では、誰からともなく「残り全員が副リーダーになろう！」と自分たちで新たな体系を生み出し、早くも団結力の高さが目に見えた瞬間でした。

ホームステイ中は、団員それぞれが毎日を楽しく過ごし、貴重な経験をしたようで、帰国早々に「話したいことがいっぱいあるよ！！」と、嬉しそうに担当職員に話す団員もいました。

派遣団員の皆さんは、これからそれぞれの未来に向かって歩いていくことと思いますが、この夏の経験を自分の「糧」として新たな道に進んで行くのか、それとも単なる「思い出」として通過してしまうのか、それは皆さん次第です。

最後になりましたが、当事業に御尽力いただいた団長の宮本さんをはじめ、団員の選考から研修まで御協力いただいた守谷市国際交流協会の皆様に心から感謝申し上げます。

守谷市役所 生活経済部 市民協働推進課